

『中国の少数民族教育と言語政策』

岡本雅享 1999 社会評論社

“Minority Ethnic Education and Language Policy in China”

Masataka Okamoto

大川多美子 国際基督教大学教育研究所

Tamiko Okawa ICU Institute for Educational Research and Service

「少数民族教育？言語政策？中国はあんなに広大な土地を持ち、少数民族もいるだろうからそういうこともやっているだろうが、日本には関係ないことだろう。日本は単一民族国家で、言語も日本語のみなのだから。」などと信じる人々はまだまだ日本に多いかもしれない。しかし、実際には、アイヌ民族、琉球民族をはじめ、韓国人、ブラジル人、東南アジアの人々、欧米人など、日本は規模は小さいかもしれないが、多民族国家、多言語国家といってもよいような状況になっている。近年では、とくに、外国人コミュニティにおける教育や、日本人との共存など、徐々に教育の分野でも関心が高まりつつある。しかし、日本においては、少数民族の存在、日本における日本語以外の言語の存在などについての一般の人々の認識はまだまだ低い。それは、国民だけでなく、国としての多言語、多民族国家の認識、意識の低さからくるのではないかと考えられる。日本政府は日本における言語政策、少数民族教育についてどのように考えているだろうか？どのような政策があるのだろうか？また、各民族はどのような言語教育をしているのだろうか？そのような疑問も自然と湧いてくる。

岡本雅享氏の著書は、多民族、多言語社会である中国の少数民族教育と、各民族が実際に行っている民族教育の実状と全体像を解明するために、著者自らのフィールドワークをもとに、公にされていない現地の実状の情報を集め、検証した研究をまとめたものである。多民族国家の教育の現状を国家政策などの「マクロ」的視点から、各民族や地域で実際に使われている教科書、人々の意識などの「ミクロ」な視点までを含み全体像で捉えられているので、国の政策と、各民族の教育の現状の双方を捉えた多民族国家の教育の実状とはどういうものかということが捉えやすい。

著者によると、これまでの中国における少数民族教育の現状についての情報は、「法律や、政策、民族学校の数などの中国政府の公的立場やハード面の情報が対外的にも積極的に流される一方で、ソフト面の状況、現場での実施状況や、具体的な反響、成果、当事者達の思いなどは、不思議なほど伝わってこない。」ものであり、著者には「こうした事象のゆえに、日本のマイノリティー問題に関わる人々の間では、中国の少数民族政策は優れており、学ぶべきだという評価がなされてきた。中国は少数民族政策はすぐれているという評価にたいして、そんなことがあり得るのだろうか、中国のマイノリティー政策はどんな理念に基づいているのか」という疑問があった。それを解明しようという試みがこの研究である。政府の理念と教育の現状の他に、そして現実の人々の意識など、公にされる国家政策の裏に隠れがちな事実を知ることができるのが、フィールドワークから得た調査結果の強みであり、この著書の特徴である。政府の政策などの公的立場を知ることとともに、こういった現場の状況、当事者の思いなどの実状を知り、全体像で捉えることにより、中国の少数民族教育、言語政策の真実が明らかにされる。

本書は、580 ページにおけるハードカバーの大作で、項目は細かく分かれ、内容は大変充実しており、構成は次のようになっている。

第一部 総論-教育、言語からみた中国のマイノリティー政策

第一章 五十五の少数民族区域自治

- 第二章 中国政府の少数民族教育施策の推移
- 第三章 現代中国における少数民族教育の概況と特徴
- 第四章 現代中国の少数民族語政策

第二部 中国各地、各民族の民族教育

- 第一章 中国朝鮮族の民族教育—二言語教育を中心として
- 第二章 中国モンゴルの民族教育
- 第三章 伝統イ文の復権—中国イ族の識字・民族教育
- 第四章 運南省における少数民族語事業と教育
- 第五章 貴州省における民族語文教育
- 第六章 新ジャンウイグル自治区における民族教育
- 第七章 チベット族の民族教育
- 第八章 広西チワン族自治区の民族語事業と教育
- 第九章 海南島リー族のリー文字

構成は、2部からなり、第一部は総論で、国家が少数民族に対して行う教育『少数民族教育』について、第二部では、それぞれの民族が自らの言語や文化を維持するために行う教育『民族教育』についてとなっている。内容は、中国の少数民族教育や、各民族の教育の実状、言語政策、二言語教育など、様々な項目が並んでおり、どんな教科書、教授法が使われているのかなどの教育現場への疑問を含めた、言語教育、多言語教育、バイリンガリズム、異文化教育、教育分野の研究にはもちろんのこと、マイノリティー問題、アジア研究、中国研究などの様々な分野でも自由に興味をもって利用できるのではないかと思われる。また、「マクロ・ミクロ双方の視点を伴って全体像をとらえる」という著者の試みは、そのページ数を忘れさせるような分かりやすさを読者に与えている。それをさらに効果的にするのは、随所に載せられている、現地で実際に使われている教科書や、著者が作成したオリジナルの地図や、統計などである。自らの足で調査したからこそ作り出すことのできた、わかりやすいオリジナルな資料は、少数民族教育をはじめ捉える者にとっても、わかりやすく理解できる手助

けになっている。

本書は、これから日本でもさらに進んでいくであろう、多民族共存を考えるためにはもちろんのこと、様々な分野で利用されると思われる。また、著者は、「はじめに」において、「頭から終わりまで通して読まねば意味がわからないようなつくりにはしていないので、興味のあるところから読んでかまわない。」と述べており、どんな人々が、どの項目に、どのような興味をもって読んでいくのか、そして、どのような研究に役立てていくのか、想像するのが楽しくなるような一冊である。